

## 〔報告〕 第三回国際南仏<sup>オック</sup>学会議

III<sup>e</sup> Congrès International de l' A. I. E. O.

岡 田 真知夫  
Machio OKADA

国際南仏学協会 (Association Internationale d'Etudes Occitanes) 主催の第三回国際大会は、南仏ラングドック地方のモンブリエで、1990年8月20日から25日にかけて6日間の日程で開催された。参加者は約200名。P. ベック、R. ラフォン、A. ロンカーリヤなどの著名な研究者や、近年中世オック語の分野で画期的な研究成果をあげている F. ジェンセン、F. ズュフレなどの姿もみられた。日本からの参加は、大高順雄氏と報告者の二名のみであった。

研究発表は、エクスカーションに当てられた8月23日を除く5日間、市内の教育資料センターの大小二部屋を会場として行われた。

会の名称からも想像できるように、発表の内容は多岐にわたったが、あらかじめ組織委員会から提示されていた総括的なテーマは、(1)オック語文学内での間テクスト性 (intertextualité)。 (2)オック語文学と他の文学の関係。 (3)文学ジャンル間の相互浸透。 (4)オック語と他の言語の関係。 (5)言語の接触と同一性。 (6)オック語一日常言語と文学言語の間。 (7)南仏文化と他の文化の関係。 (8)トゥルバドールのテキストと音楽。発表総数107の内、語学的なテーマを扱ったものは、総括テーマ(4)(5)(6)のいずれかに分類できる23点。以下は、この23点の概略である。[ ] 内は報告者の補足。

第4テーマに関連する発表——J. アホカス「プロヴァンス語—オック語—フランコプロヴァンス語— [イタリア] ピエモンテ方言：語彙論ノート」/J. アリエール「1880年頃の東部境界域におけるガスコーニュ方言とバスク語の接触—サカーズとブルシエの蒐集資料による」/J. コロミナ・イ・カスターニエ「オック語と [カタロニア] バレンシア方言の言語関係」/B. オリオ「*ALO* [G. マシニョン, B. オリオ『西部言語民族地図』] 地域 (ポワトゥー, オーニス, サントンジュ, アングーモア) におけるオイル語とオック語の接触」/T. マイセンブルク「表記体系の言語学・社会学的決定因—オック語の書記法の分析—19世紀以降新たな書記法を採用した他の言語 (カタロニア語, ルーマニア語) との比較」/J. サンタノ「ギリエム・アネリエ『ナヴァラ戦記』(13世紀) にみられるオック語と [スペイン] ナバラ方言」/P. スケルブ「オック語, フランコプロヴァンス語, フランス語における完了形三人称複数と直説法現在一人称・二人称複数形」/J. ヴェエスト「伝達手段としてのオック語に与えるフランス語の影響」。

第5テーマに関連する発表——R. シェルビデ「バスク北部のガスコーニュ方言で書かれた中世行政文書— [バスク] スール地方の『ゴシック地代帳』(1377-1690)」/M. コルティアード「オクシタノ・ロマン語 “calo” あるいは混成言語?」/J. Ph. ダルベラ「等語線の東の形成と方言域画定—アルプ・マリタイム県の場合を考える」/T. フィールド「ガスコーニュ地方南部における言語接触の力学」/H. ギテ「ロースの溝 [言語地図をプロヴァンス, 中央山塊, ラングドック東部の三地域に分割するロース河に着目した方言学的研究]」/K. モック「物語体不定詞」/P. ルー「1789年の大革命期のヴァール県の人名 [ファースト・ネーム]」/P. ソゼ「古オック

## 総会風景



背景は Montpellier の Centre régional de documentation pédagogique で、研究発表の会場となった建物。（大高順雄氏撮影）

ク語と近代オック語の母音体系—進化と標識」／R. トーラ「鼻子音に先行する古オック語 e の音色」

第6テーマに関連する発表——K. クリンゲビールは合成語の問題を扱った。残る5名（Ph. ブランシニ、J. カンタローザ、P. シジョン、T. ドレーハー、B. エツコーン）の発表は、シャンソンや文学的テキストを資料にした社会言語学的アプローチ。スペースの都合でタイトルは省略。

全体としてみた場合、やはり、トゥルバドールの抒情詩を中心とする中世文学に捧げられた発表が圧倒的に多かったのは、汎ヨーロッパ的な影響を及ぼした南仏抒情詩人たちのいまだ衰えぬ威光ゆえか。思い返せば、先駆者 F. レヌアールの時代から、オック語の研究は、トゥルバドール詩の研究と不可分の関係にあった。既に大家と言っている Ch. カンプルーや P. ベックも、優れたロマンス語学者であると同時に、中世を中心とするオック語文学の第一級の研究者である。とくに後者は、現代オック語文学の担い手ですらある。勿論、L. アリベールや J. ロンジャのような語学プロパーの泰斗も輩出しているが、報告者のように、文学研究を志しながら、遅まきながら言語そのものにも関心を抱く必要性を感じるようになった者にとっては、まことに羨ましく思える文学者と語学者の幸せな結婚が、いまなお幾たりかのオクシタニストの中に認められるのである。

大会最終日、空調設備のない発表会場を逃れて、中庭の木陰で行われた総会では、オランダの K. モック氏が新しい会長に選出された。その晩、市内のホテルで夕食を囲むパーティーが催され、大会は全日程を消化した。次回大会の開催地日程等は未定。